三帖和讃

全

162
1009

017941-000-6

特66-260

三帖和讃

阪田 篤敬／編

M26. 4

ABF-0939

特66
260

明治三十六年 内務省 印

歸命無量壽如來

南無不可思議光

法藏菩薩因位時

在世自在王佛所

覩見諸佛淨土因

國天人之善惡

建立無上殊勝願

超發希有大弘誓

五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放無量無邊光
無礙無對光炎王
清淨歡喜智慧光
不斷難思無稱光
超日月光照塵刹
一切群生蒙光照

本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就
如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海
應信如來如實言

能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻入
如衆水入海一味
攝取心光常照護
已能雖破無明闇
貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞實信心天

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明無闇
獲信見敬大慶喜
卽横超截五惡趣
一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華

彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯
印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機

釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有無見
宣說大乘無上法
證歡喜地生安樂
顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂

憶念彌陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩
天親菩薩造論說
歸命無礙光如來
依修多羅顯眞實
光闡橫超大誓願

廣由本願力廻向
爲度群生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數
得至蓮華藏世界
即證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死園示應化

本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解
報土因果顯誓願
往還廻向由他力
正定之因唯信心

惑染凡夫信心發
證知生死卽涅槃
必至無量光明土
諸有衆生皆普化
道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱

三不三信誨懇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證妙果
善導獨明佛正意
矜哀定散與逆惡
光明名號顯因緣
開入本願大智海

行者正受金剛心
慶喜一念相應後
與韋提等獲三忍
卽證法性之常樂
源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立

極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我
本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世

還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂靜無爲樂
必以信心爲能入
弘經大士宗師等
拯濟無邊極濁惡
道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

初重 南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无

二重

阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

三重

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无阿彌陀佛

南无

彌陀の名號となへつゝ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
佛恩報するもひあり
無量誓願不思議をうたがひて
御名を稱する往生は
宮殿のうちに五百歳
むなしくすぐるときたまふ

讃阿彌陀佛偈曰

曇鸞御造

南无阿彌陀佛

釋名无量壽傍經奉レ讃亦曰安養

成佛已來歷十劫
壽命方將无有量
法身光輪徧法界
照世盲冥故頂禮

又號无量光眞實明
又號无邊光平等覺
又號无碍光難思議
又號无對光畢竟依
又號光炎王大應供
又號清淨光又號歡喜光
大安慰又號智慧光
又號不斷光又號難思光

十七 又號无稱光 十八 號超日月光

十九 无等等 二十 廣大會

廿一 大心海 廿二 无上尊

廿三 平等力 廿四 大心力

廿五 无稱佛 廿六 婆伽婆

廿七 講堂 廿八 清淨大攝受

廿九 不可思議尊 三十 道場樹

卅一 眞无量 卅二 清淨樂

卅三 本願功德聚 卅四 清淨勳

卅五 功德藏 卅六 无極尊

卅七 南无不可思議光 已上略抄也

十住毘婆婆論曰

自在人 我禮 清淨人 歸命

无量德 稱讚 已上

讚阿彌陀佛偈和讚 愚禿親鸞作

南无阿彌陀佛

(一)彌陀成佛のこのかたは
いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく
世の盲冥をてらすなり
智慧の光明はかりなし
有量の諸相とことごとく
光曉かぶらぬものはなし
眞實明に歸命せよ

解脫の光輪きはもなし
光觸かぶるものはみな
有无とはなるとのへたまふ
平等覺に歸命せよ
光雲无碍如虛空
一切の有碍にさはりなし
光澤かぶらぬものろなき
難思議を歸命せよ

清浄光明ならひなし
遇斯光のゆへなれは
一切の業繫ものゝとりぬ
畢竟依と歸命せよ
佛光照曜最第一
光炎王佛となつけたり
三塗の黑闇ひらくなり
大應供と歸命せよ

(二)
道光明朗超絶せり
清浄光佛とまふすなり
ひとたひ光照かふるもの
業垢をのゝき解脫をう
慈光はるかにかふらしめ
ひかりのいたるところには
法喜をうとゝのへたまふ
大安慰と歸命せよ

无明の闇を破するゆへ
智慧光佛となつけたり
一切諸佛三乘衆
ともに嘆譽したまへり
光明てらしてたへされは
不斷光佛となつけたり
聞光力のゆへなれは
心不斷にて往生す

佛光測量かきもなし
難思光佛となつけたり
諸佛は往生嘆しつゝ
彌陀の功德を稱せしむ
神光の離相をとかされは
无稱光佛となつけたり
因光成佛のひかりをは
諸佛の嘆するところなり

(三)

光明月日に勝過して
すぐれたるなり

超日月光となつけたり
釋迦嘆してなをつきず
ほめたまへり

无等等を歸命せよ

彌陀初會の聖衆は
みたのよちになりたまひしときあつまりたまひししやうしゆのみなをことなり

算數のをよぶところなき
淨土をれかはんひとはみな
廣大會を歸命せよ

安樂无量の大菩薩

一生補處にいたるなり

普賢の德に歸してとろ
たいしたいひろまりたまふなり

穢國にかならず化するなれ

十方衆生のためにとて

如來の法藏あつあてろ

本願弘誓に歸せしむる

大心海を歸命せよ

観音勢至もろともに
慈光世界を照曜し
有縁と度してしばらくも
休息あることなかりけり
安楽浄土にいたるひと
五濁悪世にかへりては
釈迦牟尼佛のとくにて
利益衆生はきはもなし

(四)
神力自在なることは
測量すべきところなき
不思議の徳をあつめたり
无上尊を帰命せよ
安楽聲聞菩薩衆
人天智慧ほからかに
身相荘厳みなれなし
他方に順して名をつらぬ

顔容端政たくひなし
精微妙軀非人天（たへなるみなりにんにあらず てんにあらず）
虚无之身无極體（はてしんによらいなり）
平等力を歸命せよ
安樂國をねがふひと
正定聚にとゝ住すなれ
邪定不定聚くにゝなし
諸佛讃嘆したまへり

十方諸有の衆生は
阿彌陀至德の御名をきゝ
眞實信心いたりなは
れほきに所聞を慶喜せん（しんすることをえてよろこぶなり）
若不生者のちがひもへ（もしむまれずはとちかひたまへるなり）
信樂まことにときいたり
一念慶喜するひとは（しんをえてのちによろこぶことなり）
往生がならずさたまりぬ

(五)
安樂佛土の依正は
法藏願力のなせるなり
天上天下にたくひなし
大心力を歸命せよ
安樂國土の莊嚴は
釋迦无碍のみとにて
とくともつきしとのへたまふ
无稱佛を歸命せよ

已今當の往生は
(くわこにむかはるこんしやうにむかはるみらいにうまるとなり)
との土の衆生のみならず
十方佛土よりきたる
无量无數不可計なり
(かぞへがたしとなり)
阿彌陀佛の御名をきゝ
歡喜讃仰せしむれは
(よろこびほめるぎやうとなり)
功德の寶を具足して
一念大利无上なり

たとひ大千世界に
みてらん火をもすきをきて
佛の御名をきくひとは
なほく不退にかなふなり
神力无極の阿彌陀は
无量の諸佛ほめたまふ
東方恒沙の佛國より
无數の菩薩もきたまふ

(六)自餘の九方の佛國も
こゝのつのほうのほかのほとけくにをいふなり
菩薩の往勤みなれなし
わうしやうしはげんをみたてまつる
釋迦牟尼如來偈をときて
无量の功德をほめたまふ
十方の无量菩薩衆
德本うゝんためにとて
恭敬をいたし歌嘆す
はめたてまつる
みなひと婆伽婆に歸命せよ
はとけのみなり

七寶講堂道場樹

方便化身の淨土なり
（へんちけさんこくなりきはくたいしやうのしやうとなり）

十方來生きはもなし

講堂道場禮すべし

妙土廣大超數限

本願莊嚴よりれとる

清淨大攝受に

稽首歸命せしむべし

自利々他圓滿して

歸命方便巧莊嚴

ところもとはもたへたれは

不可思議尊と歸命せよ

神力本願及滿足

明了堅固究竟願

慈悲方便不思議なり

眞无量と歸命せよ

(七)

寶林寶樹微妙音

自然清和の伎樂にて
哀婉雅亮すくれたり
清淨樂を歸命せよ

七寶樹林くれゝみつ
光耀たゆひにかゝやけり
華菓枝葉まれなし
本願功德聚を歸命せよ

清風寶樹をふくときは
いつゝの音聲いたしつゝ
宮商和して自然なり
清淨動を禮す〳〵し

一一のはなのなかよりは
三十六百千億の
光明てらしてほからかに
いたらぬところはさらになし

一一のはなのなかよりは
三十六百千億の
佛身もひかりもひとしくて
相好金山のごとくなり
相好ごとに百千の
ひかりを十方にはなちてろ
つねに妙法をときひろめ
衆生を佛道にいらしむる

(八)七寶の寶池いさぎよく
八功德水みちみてり
无漏の依果不思議なり
功德藏を歸命せよ
三塗苦難なかくるとち
但有自然快樂音
とのもゝ安樂をつけたり
无極尊を歸命せよ

十方三世の无量慧　五十
れなしく一如に乗してろ
二智圓満道平等
攝化隨縁不思議なり
彌陀の淨土に歸しぬれは
すなはち諸佛に歸ずるなり
一心をもちて一佛を
ほむるは无碍人をほむるなり

信心歡喜慶所聞
乃暨一念至心者
南无不可思議光佛
頭面に禮しまてまつれ
佛慧功德をほめしめて
十方の有縁にきかしめん
信心すてにんひとは
つねに佛恩報すへし

已上四十八首 愚禿親鸞作

阿彌陀如來 觀世音菩薩 大勢至菩薩

釋迦牟尼如來 富樓那尊者 大目犍連 阿難尊者

頻婆娑羅王 韋提夫人 耆婆大臣 月光大臣

提婆尊者 阿闍世王 雨行大臣 守門者

淨土和讃 愚禿親鸞作

大經意 二十二首

(九)

尊者阿難座よりたち
世尊の威光を瞻仰し
生希有心とれとろおし
未曾見ところあやしみし

如來の光瑞希有にして
（ひかりのりかたしとなり）
阿難はなはたとゝろよく
如是之義ととゝりしに
出世の本意あらはせり
（はとけのよにいでたまふこゝろなり）
大寂定にいりたまひ
如來の光顏たゝにして
阿難の惠見をみろなはし
問斯惠義とほめたまふ

如來興世の本意には
（よにいでたまふこゝろはといふ）
本願眞實ひらきて、ろ
難値難見ときたまひ
（まうあひがたくみがたきつりかたしとなり）
猶靈瑞華としあしける
（うどんげくはのさくことのまれなるかとくとなり）
彌陀成佛のとのかたは
いまに十劫ときたれと
塵點久遠劫よりも
ひさしき佛とみゝたまふ

南无不可思議光佛　五十六

饒王佛のみもとにて
十方淨土のなかよりろ
本願選擇攝取するろ
(十)无碍光佛のひかりには
清淨歡喜智慧光
ろの德不可思議にして
十方諸有と利益せり

至心信樂欲生我と
十方諸有をすゝめてろ
不思議の誓願あらはして
眞實報土の因とする
眞實信心うるひとは
すなはち定聚のかずにいる
不退のくらゐにいりぬれは
かならず滅度にいたらしむ

五十七

彌陀の大悲ふかければは
佛智の不思議をあらはして
變成男子の願をたて
女人成佛ちかひたり
至心發願欲生と
十方衆生を方便し
衆善の假門ひらきてろ
現其人前と願しける

臨終現前の願により
釋迦は諸善をとと〳〵く
觀經一部にあらはして
定散諸機をすゝめけり
(十一)
諸善萬行とと〳〵く
至心發願せるもの〻に
往生淨土の方便の
善とならぬはなかりけり

至心廻向欲生と
十方衆生を方便し
名號の眞門ひらきてろ
不果遂者と願しける
果遂の願によりてとろ
釋迦は善本德本を
彌陀經にあらはして
一乘の機をすゝめける

定散自力の稱名は
果遂のちかひに歸してとろ
れしゝされども自然に
眞如の門に轉入する
安樂淨土をねがひつゝ
他力の信をえぬひとは
佛智不思議をうたがひて
邊地懈慢にとまるなり

如來の興世にあひがたく（よにでたまふことかたしとなり）
諸佛の經道きゝがたし
菩薩の勝法きくことも
无量劫にもまれらなり

(十二)善知識にあふことも
なしふることもまたかたし
よくきくこともかたければ
信ずることもなほかたし

一代諸教の信よりも
弘願の信樂なをかたし
難中之難ときたまひ（かたがたかなかにかたしとなり）
无過此難とのたまふ（これにすぎてかたきことなしとなり）
念佛成佛とれ眞宗
萬行諸善とれ假門
權實眞假をわかずして
自然の淨土をしらぬ

聖道權假の方便に　六十四
衆生ひさしくとゝまりて
諸有に流轉の身となる
悲願の一乘歸命せよ
已上大經意

觀經意　九首

恩德廣大釋迦如來
韋提夫人に勅してゝ
光臺現國のゝのなかに
安樂世界とにらはしむ
頻婆婆羅王勅せしめ
宿因ゝの期をまたすして
仙人殺害のむくひには
七重のむゝにとちられき

(十三)阿闍世王は瞋怒して
我母是賊としめしてろ
无道に母を害せんと
つるきをぬきてむかひける
耆婆月光れんところに
是旃陀羅とはちしめて
不宜住此と奏してろ
闍王の逆心いさめける

耆婆大臣れさへてろ
却行而退さしめつゝ
闍王つるきをすてしめて
韋提をみやれ禁しける
彌陀釋迦方便して
阿難目連富樓那韋提
達多闍王頻婆娑羅
耆婆月光行雨等

大聖れの〳〵もろともに
凡愚底下のつみひとを
逆悪もらさぬ誓願に
方便引入せしめけり
釋迦韋提方便して
淨土の機縁熟すれは
雨行大臣證として
閻王逆悪興せしむ

定散諸機各別の
自力の三心ひるむ〳〵し
如來利他の信心に
通入せんとれむふ〳〵し

巳上觀經意

彌陀經意　五首

(十四)

十方微塵世界の
念佛の衆生をみそなはし
攝取(おさめとりたまふことなり)してすてされは
阿彌陀となつけたてまつる
恒沙塵數の如來は
萬行の少善きらひつゝ
名號不思議の信心を
ひとしくひとへにすゝめしむ

十方恒沙の諸佛は
極難信ののりをとき
五濁惡世のためにとて
證誠護念せしめたり
諸佛の護念證誠は
悲願成就のゆへなれは
金剛心をにんひとは
彌陀の大恩報すへし

五濁惡時惡世界　七十二
濁惡邪見の衆生には
彌陀の名號あたへてろ
恒沙の諸佛すゝめたる

已上彌陀經意

諸經のところによりて
彌陀和讃　九首

(十五)
无明の大夜をあはれみて
法身の光輪きはもなく
无碍光佛としめしてろ
安養界に影現する
久遠實成阿彌陀佛
五濁の凡愚をあはれみて
釋迦牟尼佛としめしてろ
迦耶城には應現する

七十三

百千倶胝の劫をへて
百千倶胝のしたをいたし
したとと无量のとをして
彌陀をほめんをつきし
大聖易往（しやか佛なり　ゆきやすしと云り）ときたまふ
淨土をうたふ衆生をは
无眼人（まなこなきひと、いふ）とろをつけたる
无耳人（みゝなきひと、いふ）とろのいたまふ

无上上は眞解脫（さことにさとりひらくなり）
眞解脫は如來なり
眞解脫にいたりてろ
无愛无疑（よくのこゝろなしうたがうこゝろなしとなり）とはあらはるゝ
平等心をうるときを
一子地をなつけたり
一子地は佛性なり
安養にいたりてさとるへし

(十六)如來すなはち涅槃なり　七十六

涅槃を佛性となつけたり
凡地にしてはさとられず
安養にいたりて證すべし
信心よろこぶのひとを
如來とひとしとときたまふ
大信心は佛性なり
佛性すなはち如來なり

衆生有礙のさとりにて
（よろづのことごとへらるゝこゝろなり）
无碍の佛智をうたがへば
曾婆羅頻陀羅地獄にて
多劫衆苦にしづむなり

已上諸經意

現世利益和讃十五首

阿彌陀如來來化して
息災延命のためにとて
金光明の壽量品
ときわきたまへるみのりなり
山家の傳教大師は
國土人民をあはれみて
七難消滅の誦文には
南无阿彌陀佛をとなふへし

一切の功德にすくれたる
南无阿彌陀佛をとなふれは
三世の重罪みなのからも
ならず轉して輕微なり
(十七)南无阿彌陀佛をとなふれは
との世の利益きはもなし
流轉輪廻のつみきへて
定業中夭のうとりぬ

南无阿彌陀佛ととなふれは
梵王帝釋歸敬す
諸天善神とと〳〵く
よるひるつねにまもるなり
南无阿彌陀佛ととなふれは
四天大王もろともに
よるひるつねにまもりつゝ
よろつの惡鬼をちかつけす

南无阿彌陀佛ととなふれは
堅牢地祇は尊敬す
かけとかたちとのとくにて
よるひるつねにまもるなり
南无阿彌陀佛ととなふれは
難陀跋難大龍等
无量の龍神尊敬し
よるひるつねにまもるなり

南无阿彌陀佛をとなふれは
炎魔法王尊敬す
五道の冥官みなともに
よるひるつねにまもるなり
(十八)南无阿彌陀佛をとなふれは
他化天の大魔王
釋迦牟尼佛のみまへにて
まもらんとこころちかひしか

天神地祇はとゝく〳〵
善鬼神となつけたり
とれらの善神みなともに
念佛のひとをまもるなり
願力不思議の信心は
大菩提心なりけれは
天地にみてる悪鬼神
みなとゝくたろるなり

南无阿彌陀佛ととなふれは
觀音勢至はもろともに
恒沙塵數の菩薩と
おけのとくに身にろ〳〵り
无碍光佛のひかりには
无數の阿彌陀まし〳〵て
化佛れの〳〵とと〳〵く
眞實信心とまもるなり

南无阿彌陀佛ととなふれは
十方无量の諸佛は
百重千重圍繞して
よろとひまもりたまふなり
已上現世利益

首楞嚴經によりて大勢至
菩薩和讃したてまつる八首

(十九)勢至念佛圓通して

五十二菩薩もろともに
すなはち座よりたゝしめて
佛足頂禮せしめつゝ
教主世尊にまふさしむ
往昔恒河沙劫に
佛世にいでたまへりき
无量光とまふしけり

十二の如來あひつきて
十二劫をへたまへり
最後の如來をなつけてろ
超日月光とまふしける
超日月光との身には
念佛三昧をしへしむ
十方の如來は衆生を
一子のごとく憐念す

子の母とれもふかとくにて
衆生佛を憶すれは
現前當來とをからす
如來を拜見うたかはす
染香人のろの身には
香氣あるかとくなり
とれとすなはちなつけてろ
香光莊嚴とまふすなる

われもと因地にありしとき
念佛の心をもちてところ
无生忍にはいりしかは
いまとの娑婆界にして
念佛のひとを攝取して
淨土に歸せしむるなり
大勢至菩薩の
大恩ふかく報すへし

已上大勢至菩薩

源空聖人御本地也

高僧和讃　愚禿親鸞作

龍樹菩薩　付釋文一　十首

(一)本師龍樹菩薩は　九十二

智度十住毘婆娑等

つくりてほく西をほめ

ずゝめて念佛せしめたり

南天竺に比丘あらん

龍樹菩薩となつくゝし

有无の邪見を破すゝしと

世尊はかねてときたまふ

本師龍樹菩薩は

大乘无上の法をとき

歡喜地を證してゝ

ひとゝに念佛すゝめける

龍樹大士世にいでゝ

難行易行のみちをしゝ

流轉輪廻のわれらをは

弘誓のふねにのせたまふ

本師龍樹菩薩の
れし〳〵とつた〳〵きかんひと
本願といろにかけしめて
つねに彌陀を稱ず〳〵し
不退のくらゐすみやかに
にんとれもはんひとはみな
恭敬の心に執持して
彌陀の名號稱ず〳〵し

(二)生死の苦海ほとりなし
ひさしくしづめるわれらとは
彌陀弘誓のふねのみろ
のせてかならずわたしける
智度論にのたまはく
如來は无上法皇なり
菩薩は法臣としたまひて
尊重ず〳〵きは世尊なり

一切菩薩のたまはく
われら因地にありしとき
無量劫をへめくりて
萬善諸行を修せしかと
恩愛はなはたたちかたく
生死はなはたつきかたし
念佛三昧行してろ
罪障を滅し度脫せし

已上龍樹菩薩

天親菩薩 付釋文 十首

釋迦の教法ほけれと
天親菩薩はれんとろに
煩惱成就のわれらには
彌陀の弘誓をすゝめしむ

安養淨土の莊嚴は
唯佛與佛の知見なり
究竟せるとと虛空にして
廣大にして邊際なし（はてしなしとなり）
本願力にあひぬれば
むなしくすぐるひとなき
功德の寶海みちてて
煩惱の濁水たてなし

（二）如來淨華の聖衆は
正覺のはなより化生して
衆生の願樂とと〳〵く
すみやかにとく滿足す
天人不動の聖衆は
弘誓の智海より生ず
心業の功德清淨にて
虛空のとと〳〵く差別なし

天親論主は一心に　百

无碍光に歸命す

本願力に乘ずれば

報土にいたるとの〻たまふ

盡十方の无碍光佛

一心に歸命するところ

天親論主のみとには

願作佛心との〻たまへ

願作佛の心はとれ

度衆生のところなり（しゅじょうをわたすこころなり）

度衆生の心はとれ

利他眞實の信心なり

信心すなはち一心なり

一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心

との心すなはち他力なり

願土にいたればすみやかに
无上涅槃を證してろ
すなはち大悲をもとすなり
とれを廻向となつけたり

已上天親菩薩

曇鸞和尚付譯文三十四首

(四)本師曇鸞和尚は
菩提流支のもとにて
仙經をもくやきすて、
淨土にふかく歸せしめき
四論の講說さしもきて
本願他力をときたまひ
具縛の凡衆をみちびきて
涅槃のみとをいらしめし

世俗の君子幸臨し
勅して淨土のもへをとふ
十方佛國淨土なり
なにゝよりてか西にある
鸞師とたゝてのたまはく
わが身は智慧あさくして
いまた地位にいらされは
念力ひとしくれよはれす
（ふたいのくらゐにいたらすとなり）

一切道俗もろともに
歸すへきところをさらになき
安樂勸歸のとゝろさし
鸞師ひとりさたあたり
魏の主勅して并州の
大巖寺にろれはしける
やうやくれはりにのろみては
汾州にうつりたまひにき

(五)

魏の天子はたふとみて
神鸞とゝとゝろ號せしか
れはせしとゝろのゝの名とは
鸞公巖とゝろなつけたる
淨業さかりにすゝめつゝ
玄忠寺にゝろれはしけゝる
魏の興和四年に
遙山寺にとゝろうつりしか

六十有七ときいたり
淨土の往生とけたまふ
ゝのとき靈瑞不思議にて
一切道俗歸敬しき
君子ひとゝにれとくして
勅宣くたしてたちまちに
汾州汾西秦陵の
勝地に靈廟たてたまふ

天親菩薩のみことを
鸞師ときのたまはすは
他力廣大威德の
心行いかてかさとらまし
本願圓頓一乘は
逆惡攝すと信知して
煩惱菩提體无二と
すみやかにとくさとらしむ

(六)いつつの不思議をとくなかに
佛法不思議にしくるなき
佛法不思議といふことは
彌陀の弘誓になつけたり
彌陀の廻向成就して
往相還相ふたつなり
とれらの廻向によりてこそ
心行ともにしむなれ

往相の廻向ととくとは
彌陀の方便ときいたり
悲願の信行にしむれは
生死すなはち涅槃なり
還相の廻向ととくとは
利他教化の果をにしめ
すなはち諸有に廻入して
普賢の德を修するなり

論主の一心をとけるをは
曇鸞大師のみとをしては
煩惱成就のわれらも
他力の信をのへたまふ
盡十方の无碍光は
无明のやみをてらしつゝ
一念歡喜するひとを
おなじくすなわち滅度にいたらしむ

(七)无碍光の利益より

威德廣大の信をにて

ものならす煩惱のとほりとけ

すなはち菩提のみつとなる

罪障功德の躰となる

とほりとみつのとくにて

とほりれほきにみつれほし

さはりれほきに德れほし

名號不思議の海水は

逆謗の屍骸もとゝまらす

衆惡の萬川歸しぬれは

功德のうしほに一味なり

盡十方无碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流歸しぬれは

智慧のうしほに一味なり

安樂佛國に生ずるは
畢竟成佛の道路にて
无上の方便なりければ
諸佛淨土とすゝめけり
諸佛三業莊嚴して
畢竟平等なるとは
衆生虛誑の身口意を
治せんがためとのたまふ

(八)安樂佛國にいたるには
无上寶珠の名號を
眞實信心ひとつにて
无別道故とときたまふ
如來淸淨本願の
无生の生なりければ
本則三三の品なれと
一一とおはるとときなき

无碍光如來の名號と
かの光明智相とは
无明長夜の闇を破し
衆生の志願をみてたまふ
こゝろざしねがふことなり
不如實修行といへるとを
をしへのごとくなすといふこゝろなり
鸞師釋してのたまはく
一者信心あつからす
若存若亡するをいに
あるとなきとをもふるとをはかなふせしとなり

一者信心一ならす
決定なきをいなれは
三者信心相續せす
餘念間故とのたまふ
おしへるかゆへにしんなしといふなり
三信展轉相成す
行者といふとをいむこゝろ
信心あつからさるをいに
決定の信なかりけり

(九)決定の信なきものは

念相續せざるなり

念相續せざるものは

決定の信をにざるなり

決定の信をにざるものは

信心不淳とのたまふ

如實修行相應は

信心ひとつにさためたり

萬行諸善の小路より

本願一實の大道に

歸入しぬれば涅槃の

さとりはすなはちひらくなり

本師曇鸞大師をは

梁の天子蕭王は

れはせしおたたにつれにむき

巒菩薩とろ禮しける

已上曇鸞和尚

道綽禪師 付譚文 七首

本師道綽禪師は
聖道萬行さしれきて
唯有淨土一門を
通入すべきみちとをく

本師道綽大師は
涅槃の廣業さしれきて
本願他力をたのみつゝ
五濁の群生すゝめしむ

(十)末法五濁の衆生は
聖道の修行せしむとも
ひとりも證をえしところ
教主世尊はときたまへ

鸞師のれしへをうけつたへ
綽和尚はもろともに
在此起心立行は
しやせかいにてはたいしをかこしやうをたつるはみなしりぞけりとしるへし
此是自力とさためたり
これはこれしりぞけりといふ
濁世の起惡造罪は
あくをおこしつみをつくることのみはりことそいふ
暴風駛雨にとならす
諸佛とれらをあはれみて
すゝめて淨土に歸せしめり

一形惡をつくれとも
專精にこゝろをかけしめて
もはらこのみてといふ
つねに念佛せしむれは
諸鄣自然にのゝことりぬ
縱令一生造惡の
たとひこゝあくをつくるものなりとも
みたのちかひをたのみまひらせてわうしやうすへしとなり
衆生引接のためにとて
稱我名字と願しつゝ
わかなをとなへとくわんしたまへり
若不生者とちかひたり
もしわれをしんずるものとしてわれをたのまはしとちかひたまへるなり

已上道綽大師

善導大師 付二釋文一 二十六首

(十一)大心海より化してとろ
善導和尚とれはじけれ
末代濁世のためにて
十方諸佛に證をとふ

世世に善導いてたまひ
法照少康としあしつゝ
功德藏をひらきてろ
諸佛の本意とけたまふ
彌陀の名願によらされは
百千万劫すくれもと
いつゝのさはりはなれは
女身といおてお轉すゝき

釋迦は要門ひらきつゝ
定散諸機をとしらへて
正雜二行方便し
ひとへに專修をすゝめしむ
助正ならへて修するをは
すなはち雜修となつけたり
一心をさゝるひとなれは
佛恩報するこゝろなし

佛號むねと修すれとも
現世をいのる行者をは
とれも雜修となつけてる
千中无一ときらはるゝ
(十二)こゝろはひとつにあらねとも
雜行雜修とれにたり
淨土の行にあらぬをは
いへとへに雜行となつけたり

善導大師證ことひ
定散二心をひるがへし
貪瞋二河の譬喩をとき
弘願の信心守護せしむ
經道滅盡ときいたり
如來出世の本意なる
弘願眞宗にあひぬれば
凡夫念じてさとるなり

佛法力の不思議には
諸邪業繫さはられは
彌陀の本弘擔願を
增上緣となつけたり
願力成就の報土には
自力の心行いたられは
大小聖人みなながら
如來の弘擔に乘ずなり

惱煩具足と信知して
本願力に乘ずれば
すなはち穢身すてはて、
法性常樂證せしむ

(十三)
釋迦彌陀は慈悲の父母
種々に善巧方便し
われらが无上の信心を
發起せしめたまひけり

眞心徹到するひとは
金剛心なりければ
三品の懺悔するひと、
ひとびと宗師はのたまへり
五濁惡世のわれらとろ
金剛の信心はかりにて
なほく生死をすてはて、
自然の淨土にいたるなれ

金剛堅固の信心の
さたまるときをまちえてろ
彌陀の心光攝護して
なほく生死をへたてける
眞實信心にさるをは
一心かけぬとれしへたり
一信かけたるひとはみな
三信具せすとれもふへし

利他の信樂うるひとは
願に相應するもへに
教と佛語にしたがへは
外の雜緣さらになし

(十四)眞宗念佛きゝにつゝ
一念无疑なるをとろ
希有最勝人とほめ
正念をうとはさためたれ

本願相應せざるゆへ
雜緣きたりみたるなり
信心亂失するところ
正念うすとはのへたまへ
信は願より生すれば
念佛成佛自然なり
自然はすなはち報土なり
證大涅槃うたがはず

五濁增のときいたり
疑謗のともがらはほくして
道俗ともにあひきらひ
修するをみてはあたとなす
本願毀滅のときがらは
生盲闡提となつけたり
大地微塵劫をへて
なほく三塗にしつむなり

西路を指授せしかとも
自鄣鄣他せしほとに
曠劫已來もいたつらに
むなしくころはすきにけれ

(十五)弘誓のちからをかふらすは
いつれのときにか娑婆をいてん
佛恩ふかくれをひつゝ
つねに彌陀を念すへし
娑婆永劫の苦をすてゝ
淨土无爲を期すること
本師釋迦のちからなり
長時に慈恩を報すへし
已上善導大師

源信大師付二譯文一　十首

源信和尚ののたまはく

われとれ故佛とあらはれて
もとのほとけとなりすなり
化縁すてにつきぬれは
本土にかへるとしめしけり

本し源信ねんところに
一代佛教のろのなかに
念佛一門ひらきてろ
濁世末代をしへける

靈山聽衆とをはしける
源信僧都のをしへには
報化二土ををしへてろ
專雜の得失をあたる

本師源信和尚は
懷感禪師の釋により
處胎經をひらきてろ
懈慢界をはあらはせる

(十六)専修のひとびとをほむるには

千无一失とれしゝたり
（千にひとつのとがなしとあり）

雜修のひとびときらふには

萬不一生とのゝたまふ
（萬にひとりもはしとにがれずとなり）

報の淨土の往生は

れほめらすところあらはせる

化土にむまるゝ衆生とは

すくなめらすとれしゝたり

男女貴賤ととゝく

彌陀の名號稱するに

行住座臥をにらはれず
（あるくとまるとすわるなり）

時處諸緣をさはりなし
（どこどころようのことなり）

煩惱にまなとさゝられて

攝取の光明みされとも

大悲ものうきとゝなくて

つれにわが身をてらすなり

彌陀の報土とれおふひと
外儀のすがたはとゝなりと
本願名號信受して
寤寐にわするとなおれ
（ねてもさめてもといふなり）
極惡深重の衆生は
他の方便さらになし
ひとへに彌陀を稱してう
淨土にむまるとのたまふ

己上源信大師

源空聖人付二釋文一　二十首

（十七）本師源空世にいて、
弘願の一乘ひろめつゝ
日本二州とと〳〵く
淨土の機緣あらはれぬ

智慧光のちかひにより
本師源空あらはれて
淨土眞宗をひらきつゝ
選擇本願のこゝろをば
善導源信すゝめとき
本師源空ひろめすは
片州濁世のともがらは
いかでか眞宗をさとらまし

曠劫多生のあひだにも
出離の強緣しらざりき
本師源空いまさずは
とのたびむなしくすぎなまし
源空三五のよはひにて
无常のことはりさとりつゝ
厭離の素懷をとげしはて
菩提のみちにいらしめし

源空智行の至徳には
聖道諸宗の師主も
みなもろともに帰せしめて
一心金剛の戒師とす

(十八)源空存在せしときに
金色の光明はなたしむ
禅定博陸まのあたり
拝見せしめたまひけり

本師源空の本地とは
世俗のひと〳〵あひつたへ
綽和尚と稱せしめ
あるひは善導としめしけり
源空勢至と示現し
あるひは彌陀と顕現す
上皇群臣尊敬し
京夷庶民欽仰す

承久の太上法皇は
本師源空と歸敬しき
釋門儒林みなともに
ひとしく眞宗に悟入せり
諸佛方便ときいたり
源空ひしりとしめしつゝ
无上の信心をしへてろ
涅槃のかどとはひらきける

眞の知識にあふとは
かたきかなになをかたし
流轉輪廻のきはなきは
疑情のさはりにしくるなき
(十九)源空光明はなたしめ
門徒につねにみせしめき
賢哲愚夫もひらはれず
豪貴鄙賤もへたてなし

命終ろの期ちかつきて
本師源空のたまはく
往生みたひになりぬるに
とのたひとにとけやすし
源空みつからのたまはく
靈山會上にありしとき
聲聞僧にましはりて
頭陀と行して化度せしむ

粟散片州に誕生して
念佛宗をひろめしむ
衆生化度のためにとて
とのの土にたひ〳〵きたらしむ
阿彌陀如來化してところ
本師源空とぞしめしけれ
化緣すてにつきぬれは
淨土にかへりたまひにき

本師源空のれはりには
光明紫雲のとゝくなり
音樂哀婉雅亮にて
異香みきりに暎芳す
道俗男女預參し
卿上雲客群集す
頭北面西右脇にて
如來涅槃の儀をまもる

本師源空命終時
建暦第二壬申歳
初春下旬第五日
淨土に還歸せしめけり
已上源空聖人

已上高僧和讃一百十七首

五濁悪世の衆生の　百五十四
選擇本願信ずれは
不可稱不可說不可思議の
功德は行者の身にみてり

天竺　龍樹菩薩　天親菩薩
震旦　曇鸞和尚　道綽禪師　善導禪師
和朝　源信和尚　源空聖人　已上七人

聖德太子　敏達天皇元年正月一日誕生

當佛滅後一千五二十一年也
辛酉南无阿彌陀佛ととけるには
衆善海水のとくなり
ものの清淨の善身にたり
ひとしく衆生に廻向せん

正像末和讃　百五十五

康元二歳丁巳二月九日夜
寅時夢告云

彌陀の本願信すへし
本願信するひとはみな
攝取不捨の利益にて
无上覺をはさとるなり

正像末和讃

愚禿善信集

(一)釋迦如來かくれましまして
二千餘年になりたまふ
正像の二時はすぎはりにき
如來の遺弟悲泣せよ
末法五濁の有情の
行證なはぬときなれは
釋迦の遺法とと〳〵く
龍宮にいりたまひにき

正像末の三時には
彌陀の本願ひろまれり
像季末法のこの世には
諸善龍宮にいりたまふ
大集經にときたまふ
この世は第五の五百年
鬪諍堅固なるゆへに
白法隱滅したまへり

數万歳の有情も
果報やうやくれとろへて
二万歳にいたりては
五濁悪世の名をにたり
劫濁のときうつるには
有情やうやく身小なり
五濁悪邪まさるゆへ
毒蛇悪龍のごとくなり

(二)
无明煩悩しけくして
塵数のごとく遍満す
愛憎違順するときは
高峯岳山にとならず
有情の邪見熾盛にて
叢林棘刺のごとくなり
念佛の信者を疑謗して
破懐瞋毒さかりなり

命濁中夭刹那にて
依正二報滅亡し
背正歸邪まさるもの
横にあたとろれとしける
末法第五の五百年
との世の一切有情の
如來の悲願を信せずは
出離ろの期はなかるべし

九十五種世をけかす
唯佛一道きよくます
菩提に出到してのみろ
火宅の利益は自然なる
五濁の時機いたりては
道俗ともにあらろひて
念佛信するひとをみて
疑謗破滅さかりなり

(三)菩提とうましきひとはみな
専修念佛にあたをなす
頓教毀滅のしるしには
生死の大海きはもなし
正法の時機とれも〳〵とも
底下の凡愚となれる身は
清淨眞實のところなし
發菩提心いかゝせん

自力聖道の菩提心
ところもとはもれよはれす
常沒流轉の凡愚は
いかてか發起せしむへき
三恒河沙の諸佛の
出世のみもとにありしとき
大菩提心れとせとも
自力かなはて流轉せり

像末五濁の世となりて
釋迦の遺教のこれしむ
彌陀の悲願ひろまりて
念佛往生さかりなり
超世无上に攝取し
選擇五劫思惟して
光明壽命の誓願を
大悲の本としたまへり

(四)
淨土の大菩提心は
願作佛心をすゝめしむ
すなはち願作佛心を
度衆生心となつけたり
度衆生心といふとは
彌陀智願の廻向なり
廻向の信樂うるひとは
大般涅槃をさとるなり

如來の廻向に歸入して
願作佛心をうるひとは
自力の廻向をすてはて、
利益有情はきはもなし
彌陀の智願海水に
他力の信水いりぬれは
眞實報土のならひにて
煩惱菩提一味なり

如來二種の廻向を
ふかく信するひとはみな
等正覺にいたるゆへ
憶念の心はたえぬなり
彌陀智願の廻向の
信樂まことにうるひとは
攝取不捨の利益ゆへ
等正覺にいたるなり

(五)
五十六億七千万
彌勒菩薩はとしをへん
まことの信心うるひとは
このたひさとりをひらくへし
念佛往生の願により
等正覺にいたるひと
すなはち彌勒にれなしくて
大般涅槃をさとるへし

眞實信心うるもへに
すなはち定聚にいりぬれは
補處の彌勒にれなしくて
无上覺をさとるなり
像法のときの智人も
自力の諸教をさしれきて
時機相應の法なれは
念佛門にろいりたまふ

彌陀の尊號をなへつゝ
信樂まことにうるひとは
憶念の心つねにして
佛恩報するれもひあり

五濁惡世の有情の
選擇本願信すれは
不可稱不可說不可思議の
功德は行者の身にみてり

(六)无碍光佛のみことには
未來の有情利せんとて
大勢至菩薩に
智慧の念佛さつけしむ
濁世の有情をあはれみて
勢至念佛すゝめしむ
信心のひとを攝取して
淨土に歸入せしめけり

釋迦彌陀の慈悲よりろ
願作佛心はにしめたる
信心の智慧にいりてとろ
佛恩報する身とはなれ
智慧の念佛うるとは
法藏願力のなせるなり
信心の智慧なりせは
いかてか涅槃をさとらまし

无明長夜の燈炬なり
つねのともしひをたのはんくわんにたとへまをすなりつねのともしひをともしみなことといふ
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障れもしとなけかされ
願力无窮にましませは
罪業深重もれもからす
佛智无邊にましませは
散亂放逸もすてられす
ちりみたるはしきまゝのこゝろといふ

(七)
如來の作願をたつぬれは
苦惱の有情をすてすして
廻向を首としたまひて
大悲心をは成就せり
眞實信心の稱名は
彌陀廻向の法なれは
不廻向となつけてろ
自力の稱念きらはるゝ

彌陀智願の廣海に
凡夫善惡の心水も
(ぼんぷのぜんのこゝろあくのこゝろをみつにたとへたるなり)
歸入しぬれはすなはちに
大悲心ところ轉ずなる
(あくのこゝろをぜんとするをてんずるなりといふなり)
造惡とのむわゝ弟子の
邪見放逸さかりにて
末世にわゝ法破すゝしと
蓮華面經にときたまふ

無量

念佛誹謗の有情は
阿鼻地獄に墮在して
八万劫中大苦惱
ひまなくうくるときたまふ
眞實報土の正因を
二尊のみとときたまはりて
正定聚に住すれば
ものならず滅度をさとるなり

十方无量の諸佛の
證誠護念のみとときて
自力の大菩提心の
ものなはぬほとはしりぬべし
(八)眞實信心うるときは
末法濁世にまれなりと
恒沙の諸佛の證誠に
にたきほとをあらはせり

往相還相の廻向に　百八十

まうあはぬ身となりにせは

流轉輪廻もきはもなし

苦海の沈淪いかゝせん

佛智不思議を信すれは

正定聚にとゝ住しけれ

化生のひとは智慧すくれ

无上覺をゝさとりける

不思議の佛智を信するを

報土の因としたまへり

信心の正因うるときは

かたきかなかにをかたし

无始流轉の苦をすてゝ

无上涅槃を期するとと

如來二種の廻向の

恩德まとに謝しかたし

報土の信者はれほからす
化土の行者はかすれほし
自力の菩提かなはれは
久遠劫より流轉せり
(九)南无阿彌陀佛の迴向の
恩德廣大不思議にて
往相迴向の利益には
還相迴向に迴入せり

往相迴向の大慈より
還相迴向の大悲をう
如來の迴向なりせは
淨土の菩提はいかゝせん
彌陀觀音大勢至
大願のふねに乘してろ
生死のうみにうかみつゝ
有情をよはふてのせたまふ

彌陀大悲の擔願を
ふかく信せんひとはみな
れてもさめてもたてなく
南无阿彌陀佛ととなふへし
聖道門のひとはみな
自力の心をむねとして
他力不思議にいりぬれは
義なきを義とすと信知せり

釋迦の教法ましませと
修すへき有情のなきをへに
さとりうるもの末法に
一人もあらしとときたまふ
三朝淨土の大師寺
哀愍攝受したまひて
眞實信心すゝめしめ
定聚のくらゐにいれしめよ

他力の信心うるひとを
うやまひおほきによろこばす
なはちわが親友とし
教主世尊はほめたまふ
如來大悲の恩德は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩德も
ほねをくだきても謝すべし

已上正像末法和讃
五十八首

不了佛智のしるしには
如來の諸智を疑惑して
罪福信じ善本を
たのめば邊地にとまるなり

佛智の不思議をうたがひて
自力の稱念とのむもへ
邊地懈慢にとゝまりて
佛恩報ずるところなし
罪福信する行者は
佛智の不思議をうたがひて
疑城胎宮にとゝまれば
三寶にはなれたてまつる

(十一)

佛智疑惑のつみにより
懈慢邊地にとまるなり
疑惑のつみのふかきもへ
年歳劫數をふるとゝく
轉輪皇の王子の
皇につみをうるもへに
金鎖をもちてつなきつゝ
牢獄にいるかとくなり

自力稱名のひとはみな
如來の本願信せれは
うたがふつみのふかきゆへ
七寶の獄にろういましむる
信心のひとにれとらしと
疑心自力の行者も
如來大悲の恩をしり
稱名念佛はげむへし

自力諸善のひとはみな
佛智の不思議をうたがへは
自業自得の道理にて
七寶の獄にろういりにける
佛智不思議をうたがひて
善本德本たのむひと
邊德懈慢にむまるれは
大慈大悲はにさりけり

(十二)本願疑惑の行者には
含花未出のひとあり
惑生邊地ときらひつゝ
或墮宮胎とすてらるゝ
如來の諸智を疑惑して
信せずなからなをもまた
罪福ふかく信せしめ
善本修習すくれたり

佛智を疑惑するゆへに
胎生のものは智慧もなし
胎宮にかならずむまるゝを
牢獄にいるとたとへたり
七寶の宮殿にむまれては
五百歳のとしをへて
三寶を見聞せざるゆへ
有情利益はさらになし

邊地七寶の宮殿に
五百歲まていてすして
みつから過咎をなさしめて
もろ〳〵の厄をうくるなり
もろくあやうきなり
罪福ふかく信しつゝ
善本修習するひとは
疑心の善人なるゑに
方便化土にとまるなり

(十三)彌陀の本願信せれは
疑惑を帶してむまれつゝ
はなはすなはちひらけれは
胎に處するにたとへたり
ときに慈氏菩薩の
世尊にまふしたまひけり
何因何緣いかなれは
胎生化生となつけたる

如來慈氏にのたまはく
疑惑の心をもちなから
善本修するをたのみにて
胎生邊地にとゝまれり
佛智疑惑のつみをへに
五百歳まて牢獄に
おたくいましめられはします
これを胎生とときたまふ

佛智不思議をうたがひて
罪福信する有情は
宮殿にかならずむまるれは
胎生のものとときたまふ
自力の心をむねとして
不思議の佛智をたのまれは
胎宮にむまれて五百歳
三寶の慈悲にはなれたり